



国有林野

事業の取組

九州・沖縄の 生物多様性 保全への取組



▲西表島森林生態系保護地域内の
サキシマスオウノキ



▲屋久島森林生態系保護地域内の縄文杉



▲西表島森林生態系保護地域内の
マングローブ林



▲シカが背伸びして
葉を食べている様子



▼GPS首輪を装着したシカ

九州・沖縄の国有林野は、原生的な天然林から人工林、高山帯など様々なタイプの生態系から成り立っています。それらの生態系は、様々な生物が生息・生育する場所であることから、我が国の生物多様性の保全を図る上で重要な構成要素となっています。

九州森林管理局では、原生的な森林生態系や希少な動植物の生息・生育地、更には遺伝資源の適切な保護・保全に努めるとともに、森林生態系への大きな脅威となっているシカの被害対策等に取り組んでいます。

◀ゴイシツバメシジミ食草の
シシランの自然復帰状況

「保護林」や「緑の回廊」の設定による生物多様性の保全

国有林では、原生的な森林生態系や貴重な動植物が生息・生育している森林を「保護林」として設定し、原則伐採を行わないなど厳格な保護管理を行っており、九州森林管理局では、九州・沖縄各県合わせて95箇所、54,520haの保護林を設定しています。

九州の代表的な保護林としては、約15,000haに及び「屋久島森林生態系保護地域」があり、ここでは亜熱帯から亜高山帯までの植生が見られるほか、樹齢数千年のヤクスギ林が生育しており、その大部分が我が国で初めて登録された世界自然遺産地域となっています。また、「西表島森林生態系保護地域」には、日本最大規模のマングローブ林や、スダジイ、タブノキ、オキナワウラジロガシ等からなる原生的な亜熱帯林等が生い茂り、イリオモテヤマネコをはじめ多くの固有種や希少種が生息・生育しています。なお、「琉球諸島」(奄美地方を含む)は、林野庁が環境省とともに開催した検討会において世界自然遺産候補地に選定されており、現在、関係機関が

連携して世界自然遺産推薦に向けた検討・対策を進めています。

一方、野生動植物の生息・生育地を結び移動経路を確保するため、保護林と保護林の間を結ぶ「緑の回廊」を2箇所を設定しています。

このうち、「大隅半島緑の回廊」は、鹿児島県大隅半島の3つの保護林を結び、幅約500m、長さ約22kmの森林帯で、タブノキ、イスノキ、アカガシなどの照葉樹林帯を代表する自然植生が見られ、その他の植物相も豊かな場所になっています。

もう一つの「綾川上流緑の回廊」は、日本最大規模の照葉樹林が残る宮崎県綾町内の3つの保護林を河川部及び稜線部に沿って結ぶ幅約400m、長さ5kmの森林帯で、シイ・カシ類の照葉樹を主体とした様々な自然植生が見られます。

九州森林管理局では、全ての「保護林」及び「緑の回廊」を対象に、林分状況等を客観的に把握し、状況に応じた順応的管理等を行うため、定期的にモニタリング調査を行い、調査によって得られた結果を、植生の保全・管理や区域の見直し等に活用しています。

希少な野生動植物の保護管理

絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律に基づき国内希少野生動植物種のうち、11種の保護管理に取り組んでいます。

具体的な取組内容は、①職員や森林管理局長が任命した自然保護管理員による巡視、②生息状況・生息環境の調査、③保護管理対策の検討、④生息・採餌環境の保全や整備、⑤観察会等の実施を通じた普及啓発等となっています。これらについて、長崎森林管理署では「ツシマヤマネコ」、熊本森林管理署と熊本南部森林管理署では「ゴイシツバメシジミ」、鹿児島森林管理署では「オオトラツグミ」、オーストンオオアカゲラ、アマミヤマシギ、アマミノクロウサギ」、沖縄森林管理署では「ノグチゲラ、ヤンバルクイナ、ヤンバルテナゴカガネ、イリオモテヤマネコ」、カンムリワシ」について、保護管理を推進しています。

シカの被害対策

近年、シカによる森林・林業被害が深刻化していますが、九州森林管理局管内においてもシカの生息数や生息区域が著しく増加・拡大し、深刻な農林業

被害の発生に加え、多くの植物が被害により減少・消失しています。また、これらの植物を餌や棲み家とする昆虫や動物が生息できなくなるなど森林の生物多様性の大きな劣化が懸念されています。

九州森林管理局では、関係機関とも連携を図りつつ、根本的な対応策であるシカの個体数調整方策を含む総合的な被害対策の構築に向け様々な取組を行っています。

まず、シカ被害の著しい地域において、これまでの被害情報・生息状況等を基に、より詳細なシカの生息・分布状況の把握、個体数調整方策の検討、早急に保全すべき絶滅危惧ⅠA類のツクシテンナンショウなどの生育地の保全対策を実施しています。

さらに、シカの効果的・効率的な捕獲技術の開発に向けて、森林技術センターにおいて、シカの生息状況や行動パターン等を把握しつつ、くくり罠、箱罠、捕獲柵、誘導柵を用いた捕獲方法の実証等に取り組んでいます。

次に、国有林職員が自ら年間を通じてシカの捕獲に積極的に取り組むとともに、平成24年1月には、第2回シカ捕獲業務

検討会を開催し、職員の捕獲技術の共有を図るなど捕獲効率の向上に努めています。

なお、増えすぎたシカによる影響や危機的状況等について、地域での情報交換・共有化を進めるため、一般市民の方々にも多数参加いただきながら「森林環境シンポジウム」を開催し、積極的な情報発信を進めています。

おわりに

九州森林管理局ではこれらの様々な取組のほかにも、森林・林業に関する各種シンポジウムやセミナーの開催、生物多様性のパンフレットの作成・配付を行うなど、普及啓発活動を積極的に進めており、今後も地域や関係機関とも連携を図りながら生物多様性の保全に向けた取組を進めていくこととしています。



森林環境シンポジウム(大分県佐伯市)